

# *Paṭhamasambodhi* 第14章 Parinibbānakathā 訳注研究(1)

岩井昌悟

## はじめに

本稿では George Cœdès の校訂になる *Paṭhamasambodhi* の第14章 Parinibbānakathā の訳注研究の(1)として、校訂本の231頁から236頁の16行目までを訳出する。釈尊の雨安居地のリストが示された後に、舍利弗の入滅の物語がつづく。

まずはここで校訂者 Cœdès の見解に従って *Paṭhamasambodhi* という文献を紹介しておきたい。

この *Paṭhamasambodhi* と呼ばれる仏伝文献については、作者も、最初にどこで成立したのかも、何も明らかではなく、唯一はっきりしていることは、タイのラーマ三世 (1824-1851) の求めで、パラマヌチット・チノーロット親王 (1790-1853) が写本を収集し、1845年に編纂したのが、現行の29の章 (pariccheda) からなる版であるということだけである。

29章の内訳は以下の通りである。

Paramānujit 版		Cœdès 版 <sup>(1)</sup>
1 Vivāhamāṅgalakathā	浄飯とマーヤの結婚	なし
2 Tusita	兜卒天上の菩薩	I Tussita
3 Gabbhābhiniṅkhamana	入胎	II Gabbhābhiniṅkhamana

(1) *The Paṭhamasambodhi*, ed. by George Cœdès, edition prepared by Jacqueline Filliozat, PTS, Oxford, 2003, pp.231-236.

(2) 以下は前注の校訂本の Introduction (Jacqueline Filliozat による) の後に付された Cœdès による論考 “An Indochinese Life of the Buddha: Paṭhamasambodhi” (1966年) にもとづいている。pp.lv-lxvii.

(3) 参考までに Cœdès 版の14章の章題を併記する。ただし各章の対応関係は、筆者が Paramānujit 版を確認していないため、憶測に過ぎない。章名から判断するに Paramānujit 版は章を増やすにあたって、増稿するだけでなく、古い版で一章にまとめられていた内容を分割することもしているようである。

4	Lakkhaṇapariggaha	アシタ仙による占相	III Lakkhaṇapariggaha
5	Rājabhiseka	菩薩の灌頂	IV Rājabhiseka <sup>(4)</sup>
6	Mahābhiniikkhamana	出家	V Mahābhiniikkhamana
7	Dukkarakiriyā	苦行	VI Dukkarakiriyā (Buddhapūjā <sup>(5)</sup> )
8	Buddhapūjā	仏供養	
9	Māravijaya	降魔	VII Māravijaya
10	Abhisambodhi	成道	VIII Abhisambodhi
11	Bodhisabbaññū	菩提樹下の一切智者	IX Bodhisabbaññūbuddha <sup>(6)</sup>
12	Brahmajhesanā	梵天勸請	X Brahmajhesana
13	Dhammacakka	初転法輪	XI Dhammacakka
14	Yasapabbajā	ヤサの出家	XII Pañcasatasakya- rajababbajā <sup>(7)</sup>
15	Uruvelagamana	ウルヴェエラー訪問	
16	Aggasāvaka-pabbajā	舎利弗・目連の出家	
17	Kapilavatthugamana	帰郷	
18	Bimbāvilāpa	ビンバーの嘆き	
19	Sākyarājababbajā	釈迦族の王族の出家	
20	Metteyabuddhavyākaraṇa	弥勒への授記	
21	Buddhapitunibbāna	浄飯王の入涅槃	
22	Yamakapāṭihāriya	双神変	
23	Desanā	天界における仏による母への教誡	
24	Devorohana	天界からの降下	
25	Aggasāvakanibbāna	舎利弗・目連の般涅槃	XIV Parinibbānakathā
26	Mahāparinibbāna	仏の般涅槃	
27	Dhātuvibhajjana	仏舎利の分配	
28	Mārabandhana	ウバグブタによるマール捕縛 <sup>(8)</sup>	

- (4) 菩薩の王宮での生活について記述している。結婚や四門出遊が説かれる章である。菩薩が灌頂される場面は結婚の後に説かれている (Cœdès 校訂本 pp.57-58)。
- (5) Cœdès 版では章はたてられているが、番号が付されていない。これは Buddhapūjā を、別建てする写本と Dukkarakiriyā に含める写本とがあるためらしい。Buddhapūjā の部分にはスジャーターの乳粥供養、カーラ龍王、ソッティヤによるクサ草供養などが説かれる。「菩薩の供養」ではなく「仏の供養」と呼ばれる理由は現時点ではよくわからない。
- (6) 成道後の数週間が記述されている。
- (7) Cœdès 版ではこの章にヤサの出家などの複数の事績が盛り込まれている (弥勒への授記の記事はない)。この章題 ‘Pañcasatasakyarājababbajā’ からは *Jātaka* 第536話や *Dhammapada-atthakathā* (vol.III, p.253-256) などに見える500人の釈迦族の出家の事績が期待されるが、しかしながら Cœdès 版にその話は見出されず、代わりに浄飯の涅槃の記事の後に *Jātaka* 第281話や *Jātaka* 第485話に見えるマハーパジャーパティエーら500人とラーフラの母ら500人の釈迦族の女性たちの出家が物語られる。
- (8) 内容は *Divyāvadāna* (Cowell 本, pp.350-364) のものと近いらしい。平岡聡『ブッタが謎解く三世の物語』下、大蔵出版、2007年、pp.54-71参照。

29 Pañca-(or Dhātu)-antaradhāna	五種の隠没 <sup>9)</sup>	なし
---------------------------------	---------------------	----

*Paṭhamasambodhi* はタイ、ラオス、カンボージャに知られる仏伝であり、また近代に Henry Alabaster がタイの仏伝としてこの文献を西洋に紹介している<sup>10)</sup>。

現行の形態に整えられるまで *Paṭhamasambodhi* が被った多くの変遷に関する、Cœdès の見解はおおよそ以下のものである。

最初の成立地について、スリランカはそこではこの文献がほとんど完全に忘れ去られてしまっているためあり得ず、Paul Bigandet によって西洋に紹介された *Mālālaṅkāravatthu* を有したビルマも除かれ<sup>11)</sup>、西暦12世紀を成立の上限とした上でカンボージャが除かれ、14世紀のスコータイ、16世紀のチェンマイが候補に挙がり、アユタヤも不可能ではないとされる<sup>12)</sup>。

(9) 「五種の隠没」(pañca-antaradhāna) については浪花宣明『サーラサンガハ』、平楽寺書店、1998年、pp.72-90参照。

(10) Henry Alabaster, *The Wheel of the Law, Buddhism illustrated from Siamese Sources by the Modern Buddhist, A Life of Buddha, and an Account of the Phrabat*, London, 1871.

Alabaster は *The Wheel of the Law* を ‘The Modern Buddhist’ ‘A Life of Buddha’ ‘The Phrabat’ の3部で構成し、第2部で仏伝を紹介するに当たり、Pathomma Somphothiyan (First Festival of Omniscience) にもとづいて、浄飯とマーヤの結婚の記述から始まり、成道で終わる仏伝を紹介している。Alabaster の参照したタイ写本がパラマヌチット版でないことは明らかである。Alabaster は序分の中で (p.xxv) 自身の参照した写本が、成道で終わっていると述べているからである (my Siamese manuscript concludes with the attainment of omniscience)。

(11) P. Bigandet, *The Life or Legend of Gaudama, The Buddha of Burmese*, 2vol. (初版) Rangoon, 1858; (第2版) Rangoon, 1866; (第3版) London, 1879.

Paul Ambrose Bigandet (1813~1894) はカトリックのランゲン司教であった。*The Life or Legend of Gaudama* はビルマの伝承に基づく仏伝といくつかのジャータカ (Dzats) と仏教概論からなる。Bigandet はこの仏伝を初め “Malla-linkara-wouttoo” (*Mālālaṅkāravatthu*) に基づいて叙述し、第2版の準備をしている時に “Tathagath-oudana” (*Tathāgata-udāna*) を得て前者に不足しているものを補った。両写本ともパーリ語からビルマ語に訳されたものであったらしい。Bigandet は *Tathāgata-udāna* の成立年に言及していないが、*Mālālaṅkāravatthu* が A.D.1773年の成立であると記している。

(12) Oskar von Hinüber, *A Handbook of Pāli Literature*, Indian philology and South Asian studies v. 2. W. de Gruyter, 2000, p.180は、写本の中で年代のわかる最古のものが1574年と1592年の書写であり、それゆえ成立年代がそれを下ることはなく、Cœdès の主張する14世紀か16世紀の中の、後者は除外してよいとする。

Cœdès は ‘Paṭhamasambodhi’ という題名から、この作品は、兜卒天の記述から始まり、成道の記述で終わっていたと推測する<sup>(13)</sup>。もともと8章(Cœdès版のI~VIII)から成っていたが、その少し後で、2, 3の章(Cœdès版のIX, X, XI)が加えられ、バーラーナシーにおける初転法輪まで物語が延長された。この段階がCopenhagenのRoyal Library所蔵になる、1812年に書写された、Yuon方言(タイ語の一方言)による翻訳を伴う一写本(shelfmark Laos 78)に見られるRecensionに対応するという。

さらに下って般涅槃までの記事が加わったのが、およそ15の章からなる18世紀の写本(Missions Étrangèresによってもたらされた、パリのBibliothèque nationale所蔵の不完全な諸写本であり、それらのほとんどはタイに由来する)に見られる形態である。

そして最終的なÉcole française d’Extrême-Orient (EFEO)に保存されている1786年書写の写本に代表される、およそ18章からなる形態になって「ウパグプタによるマーラ捕縛」「浄飯とマーヤの結婚」「五種の隠没」といった章が加わる。

(13) しかしながら諸アツカターにおいて、‘paṭhamabodhi’「成道後第一期」という語が、釈尊の45年の教導生活を「初期」‘paṭhamabodhi’、「中期」‘majjhimbodhi’、「後期」‘pacchimabodhi’の3期に分けた中の「初期」を指し、等分するならば成道後第15年までは初期にあたり、また成道後20年までを‘paṭhamabodhi’とする用例を考慮に入れるならば、‘paṭhamasambodhi’という題名から、成道までで記事が終わっていたと推測する根拠にはならないかもしれない。

*DN.-A.* (vol.I, p.066) : etth’ antare pañcattālisavassaparimāṇakāle paṭhamabodhiyā pi majjhimbodhiyā pi pacchimabodhiyā pi yaṃ bhagavatā bhāsitaṃ suttam, geyyam ... pe ... vedallam, taṃ sabbam atthato byañjanato ca anupavajjam .....

この間〔成道から般涅槃するまでの〕45年の間、成道後の初期でも、中期でも、後期でも、世尊によって説かれたsutta, geyya ..... vedallaは全て、義からも相からも批難されるところがなく……。他に*MN.-A.* (vol.I, p.50), *AN.-A.* (vol.I, p.109)に同文あり。

また以下のように‘paṭhamabodhiyam’を第20年までとする記事もある。

*AN.-A.* (vol.II, p.097) : bhagavatā hi paṭhamabodhiyam vīsati vassāni vassūpanāyikā appaññattā ahoṣi. bhikkhū anibaddhavāsā vasse pi utuvasse pi yathāsukhaṃ vicariṃsu.

世尊は成道後第1期の20年間、入雨安居の制を定めておられなかった。諸比丘は定住することなく、雨期もそれ以外の時期も望むままに遊行した。

*AN.-A.* (vol.II, p.124) : tathāgato hi paṭhamabodhiyam vīsati vassāni anibaddhavāso hutvā yattha yattha phāsukaṃ hoti, tattha tatth’ eva gantvā vasi.

なんとすれば如来は成道して間もない頃、20年間、定住することなく、安穩あるところ何処にでも赴いて住された。

1845年のパラマヌチット版はテキストを vitthāra の文体に再構成し、初転法輪のあとに多数の挿話をはさむことで章数を29まで増やしている。

以上が Cœdès の見解を要約したものである。<sup>(14)</sup>

このような新しい成立になる文献を訳出する理由を述べておきたい。

南方上座部の仏伝文献としてもっとも影響力のあった *Nidānakathā* と比較した場合、*Paṭhamasambodhi* の降兜卒からカピラヴァットゥ帰郷までの記述は、筋書きは *Nidānakathā* とほとんど違わないけれども、細かな情報がパーリ聖典や諸アッタカターによって補われて、部分的には *Nidānakathā* よりも詳細になっている。またそれ以降の記述は、*Nidānakathā* が祇園精舎の建立で終わっているため、詳細さで *Paṭhamasambodhi* に比肩し得る文献としては、Paul Bigandet によるビルマの仏伝くらいしか挙げるができない。<sup>(15)</sup> しかしこれは英語で紹介されたのみで原典は伝わらないため、パーリ語で伝わる *Paṭhamasambodhi* は貴重である。

*Paṭhamasambodhi* には目新しい情報はあまりなく、パーリ聖典や諸アッタカターから知られる情報がほとんどであるけれども、所々に散在している情報が時系列にまとめられている点に資料的価値が大きいであろう。歴史的な釈尊を知るための資料として相応しくないことはもちろんであるが、南方上座部のイメージする仏伝の、特に *Nidānakathā* の記事に接続する釈尊の事績の時系列を知る一級の資料のひとつであろう。

## 凡例

1. *The Paṭhamasambodhi*, ed. by George Cœdès, edition prepared by Jacqueline Filliozat, PTS, 2003の本文テキストを底本とし、異読の参照は同校訂本の脚注のものに限る。
2. 異読の採用は以下の原則に則る。
  - ① 固有名詞については、異読の中に、より一般的な、または正しい綴りが得られる場合は訂正し、脚注に底本に挙がる形を示す。異読に

(14) しかしながら Henry Alabaster の参照した写本が「浄飯とマーヤの結婚」に始まり、成道で終わっていたことをどのように説明できるであろうか。

(15) 西暦1516/1517年に成立し、1527年に Ratanapañña によって増稿された年代記 *Jinakālamāli* も仏伝を含んでいるが、記述はずっと簡略である。

なければそのままとし、脚注に一般的な、または正しい綴りを\*を付して示す。

- ②固有名詞以外については、異読の支持が得られる場合は、訂正して脚注にその旨を明記して底本の形を示す。異読の支持なく emendation を施す場合、本文に\*を付して訂正し、脚注において底本中の当該の語に下線を付す。
3. 内容に関する注釈は和文に脚注を付す。
4. [ ] 内の数字は校訂本の頁の数字を示す。
5. 改行は適宜、任意に行った。

## XIV Parinibbānakathā

[231] evaṃ bhagavā mātugunapaccupakaraṇatthāya te māse tāvatimsabhavane pārīcchattakamūle<sup>(16)</sup> paṇḍukambalasilātale dhammadesanattāya vassaṃ upagacchi. vuṭṭhavasso bhagavā saggato otaritvā devamanussānaṃ atthaṃ pariyesanto gāma-nigama-janapada-rājadhānīsu cārikaṅ caramāno buddho ca nāma aniccavāso ahoṣi.

このように世尊<sup>(17)</sup>は母の恩徳に報いるために、三ヶ月間、三十三天のパーリチャッタカ樹の下、パンドウカンバラ岩の上において、法を説示するために、雨安居に入った。雨安居を過ごし終えた世尊は、天界から降りて、神と人の利益を求めつつ、ガーマ・ニガマ・ジャナパダ・王都を遊行しながら、ブッダは住処を定めなかった。

abhisambodhito paṭṭhāya paṭhamaṃ<sup>(18)</sup> bārāṇasinagaraṃ upanissāya kheme migadāye va isipatane dvāsaṅgaṃ dhammacakkaṃ pavattento tatth' eva vassaṃ vasi.

<sup>(19)</sup> 現等覺以降、第一にバーラーナシー都の近くで、安穩な鹿野園、イ

(16) pārīcchattakamūle. 他所の異読 (H, P<sub>o</sub>, P<sub>i</sub>) に pārīcchattakamūle という綴りもある。注<sup>(22)</sup>参照。

(17) この第14章の前に位置する第13章 ‘Desanāparivatta’ は釈尊の三十三天における雨安居とそこにおけるアピダンマの説示、および三十三天からの降下を記述している。

(18) isipatane. 底本は isipattane. 異読 (C, H, P<sub>i</sub>) を採用する。

(19) ここより以後、釈尊の成道後の雨安居地を挙げる。雨安居地伝承についての詳細は拙稿「原始仏教聖典資料に記された釈尊の雨安居地と後世の雨安居地伝承」『原始佛教聖典資

シパタナにおいて十二支の法輪（四諦の三転十二行相）を転じて、そこで雨安居を過ごした。

dutiya-tatiya-catutthavasse rājagahaṃ upanissāya veļuvane mahāvihāre viharanto veneyyajanamaṇḍalaṃ saṃsārasamudde nimuggaṃ uddharanto tatth' eva vassaṃ vasi.

第2, 第3, 第4の雨期には, 王舎城の竹林大精舎に住しつつ, 教導されるべき人々の群れが輪廻の海に沈んでいるのを引き上げながら, そこで雨安居を過ごした。

pañcame pana vasse vesālinagaram upanissāya mahāvane kūṭāgārasālāyaṃ viharanto veneyyajanassa amatadhammavibhāgaṃ dātukāmo tatth' eva vassaṃ vasi.

第5の雨期には, ヴェーサーリー都近くの大林重閣講堂に住しつつ, 教導されるべき人々に不死の法を分け与えようと, そこで雨安居を過ごした。

chaṭṭhe pana vasse makulapabbate<sup>(20)</sup> vasanto yakkha-deva-manussānaṃ dametvā tatth' eva vassaṃ vasi.

第6の雨期には, マクラ山<sup>(21)</sup>に住しつつ, ヤッカ・神々・人々を調御しつつ, そこで雨安居を過ごした。

sattame pana vasse tāvatimsabhavane pārīcchattakamūle paṇḍukambalasilātale nisīditvā mātopamukhānaṃ devānaṃ atthāya abhidhammaṃ desetvā tatth' eva tayo māse vassaṃ upagacchi.

第7の雨期には, 三十三天のパーリッチャッタカ樹の下, パンドウカンバラ岩の上に坐って, 母をはじめとする神々のために, アビダンマを説示し, そこで3ヶ月間, 雨安居に入った。

aṭṭhame [232] pana vasse gaggarājanapade<sup>(23)</sup> suṃsuṃmāragiriṃ

料による釋尊傳の研究】【6】中の【論文5】、2002年、pp.55-74を参照されたい。南方上座部の正統的な雨安居地伝承と思われる *Āṅguttaranikāya-aṭṭhakathā* と *Buddhavaṃsa-aṭṭhakathā* に出るものは、ここに示されるリストとかなり異なっている。

(20) makulapabbate. 底本は makuṭapabbate. 異読 (H, P<sub>1</sub>) を採用する。

(21) 「マクラ山」は、このテキストの異読にはないが、「マククラ山」(maṅkulapabbata) という綴りもある。

(22) pārīcchattakamūle. 異読 (H, P<sub>0</sub>, P<sub>1</sub>) に pārīcchattakamūle もあり。

(23) gaggarājanapade. \*Bhaggājanapade 國の誤りであろう。

upanissāya bhesakalāvane migadāye veneyyajanānaṃ nibbānaṃ  
\*pavesento tatth' eva vassaṃ vasi.<sup>(24)</sup>

第8の雨期には、ガッガラー国のスンスマーラギリのベーサカラー林の鹿野園において、教導されるべき人々を涅槃に入らせながら、そこで雨安居を過ごした。

navame vasse kosāmbinagare ghoṣitārāme viharanto veneyyajanānaṃ vinento tatth' eva vassaṃ vasi.

第9の雨期には、コーサンビー都のゴーシタ園に住しつつ、教導されるべき人々を導きつつ、そこで雨安居を過ごした。

dasame pana vasse pālileyvavanasāṇḍe te māse vivekavāsaṃ vasanto  
tatth' eva vassaṃ vasi.<sup>(25)</sup>

第10の雨期には、パーリレッヤ林において3ヶ月独坐住を過ごしながら、そこで雨安居を過ごした。

ekādasame pana vasse cetiyapabbate viharanto veneyyajanassa  
mokkhasampādanaṃ karonto tatth' eva vassaṃ vasi.<sup>(26)</sup>

第11の雨期には、チェーティヤ山に住しつつ、教導されるべき人々を解脱に達成させながら、そこで雨安居を過ごした。

dvādasame pana vasse verañjanagare verañjena brāhmaṇena  
nimantito tatth' eva temāsaṃ vassaṃ vasi.

第12の雨期にはヴェーランジャ都において、ヴェーランジャ婆羅門に招かれてそこで3ヶ月、雨安居を過ごした。

terasame pana vasse bhesakalāvane yakkhagaṇādīnaṃ dhammaṃ  
desento tatth' eva te māsāṃ vassaṃ vasi.

第13の雨期には、ベーサカラー林において、ヤッカの群れなどに法を説示しつつ、そこで3ヶ月雨安居を過ごした。<sup>(27)</sup>

(24) pavesanto. paveseti の現在分詞は pavesento である。

(25) ガッガラー國。バグガ國の誤りであろう。

(26) pālileyvavanasāṇḍe. 底本は pālilayvavanasāṇḍe. 異読 (P<sub>0</sub>, P<sub>1</sub>) を採用する。このテキストの異読にはないが、pārileyvavanasāṇḍa という綴りもある。

(27) cetiyapabbate. \*cāliyapabbate の誤りか。異読になし。

(28) チェーティヤ山。「チャーリヤ山」の誤りであろうか。一般的には、第11年は Nalā brāhmaṇagāma であり、Cāliyapabbata は第13年と第18年の雨安居地である。

(29) 一般的には第13年は Cāliyapabbata とされ、Bhesakalāvana は第8年1回きりの雨安居地である。

cuddasame vasse sāvattihīpuraṃ upanissāya jetavane mahāvihāre viharanto veneyyañānam anuggahāya dve vāre saddhammabheriṃ ninnādentō tath' eva temāsaṃ vassaṃ vasi.

第14の雨期には舎衛城の祇園大精舎に住しつつ、教導されるべき人々の摂受のために2回、正法の太鼓を響かせつつ、そこで3ヶ月、雨安居を過ごした。

pañcadasame vasse kapilavatthunagaraṃ upanissāya rohiṇinaditīre nigrodhārāme nātisaṅgahaṃ karonto tath' eva vassaṃ vasi.

第15の雨期にはカピラヴァットゥ都のローヒニー川岸のニグロード園において親族を愛護しつつ、そこで雨安居を過ごした。

soḷasame vasse ālavānagare ālavakaṃ dametvā caturāsītiyā pāṇasahassānaṃ mokkhamagge patiṭṭhapento tath' eva temāsaṃ vassaṃ vasi.

第16の雨期には、アーラヴィー都においてアーラヴァカ〔ヤッカ〕を調伏して、八万四千の生類を解脱道に確立させつつ、そこで3ヶ月雨安居を過ごした。

sattarasame aṭṭhārasame [233] ekūnavīsitime vasse bhagavā puna rājagahe vassaṃ upagacchī.

第17、第18、第19の雨期には、世尊は再び、王舎城において雨安居に入った。

vīsitime vasse puna bhagavā makulapabbate<sup>(31)</sup> vassaṃ vasi.

第20の雨期には、再び、世尊はマクラ山において雨安居を過ごした。<sup>(32)</sup>

ekavīsitime vasse pāḷiyyapabbate<sup>(33)</sup> bhagavā vassaṃ vasi.

第21の雨期には、パーリレツヤ山において、世尊は雨安居を過ごした。<sup>(34)</sup>

(30) 一般的には第17年と第19年は王舎城、第18年は Cāliyapabbata である。ただし Spence Hardy の伝える雨安居地伝承がこと一致して、第17～19年をすべて王舎城にしている。拙稿「前掲論文」 pp.71-73の表参照。

(31) makulapabbate. 底本は makuṭapabbate. 異読 (C<sub>1</sub>, H, P<sub>o</sub>, P<sub>i</sub>) を採用する。

(32) 注(21)参照。一般的には第20年は王舎城か舎衛城である。

(33) 異読 (C) に pāḷiyyapabbate あり。あるいは \*cāliyapabbata の誤りか? パーリレツヤ林 (Pāḷiyyavanasāṇḍe) は知られているが、同名の山は知られていない。

(34) 第21年以降第44年まで全て舎衛城とする雨安居地伝承が一般的であり、21年以降にこのように種々の地名を挙げるのは特殊な伝承である。しかしながら新しい地名は挙がっておらず、すでに言及された地を繰り返していることから、特に注目される伝承ではない。

bāvīsatime vasse puna bhagavā bhesakalāvane vassam vasi.

第22の雨期には、再び、世尊はペーサカラー林において雨安居を過ごした。

tevīsatime catuvīsatime pañcavīsatime vasse puna bhagavā sāvattthiyam vasssam vasi.

第23、第24、第25の雨期には、再び世尊は、舎衛城において雨安居を過ごした。

chabbīsatime vasse puna bhagavā cetiyapabbate vassam vasi.

第26の雨期には、再び世尊はチェーティヤ山において雨安居を過ごした。<sup>(35)</sup>

sattavīsatime aṭṭhavīsatime vasse puna bhagavā kapilavatthupure nigrodhārāme vassam vasi.

第27、第28の雨期には、再び世尊はカピラヴァットゥ都のニグローダ園において雨安居を過ごした。

ekūnatimśatime vasse .....<sup>(36)</sup>

第29の雨期には……

..... veluvagāmake<sup>(37)</sup> pacchimavassam vasi.

……竹林村において最後の雨安居を過ごした。

imesam sampiṇḍitvā tathāgato gihikāle ekūnatimśavassāni mahāpadhānakāle chavassāni buddhattakāle pañcacattāḷisavassāni ti sabbāni tāni asīti-āyuko bhagavā ahoṣi.

これを統合すれば、如来は在家時が29年、偉大な努力の時代が6年、ブツダになってからの時代が45年ということで、全体で世尊は80歳であった。<sup>(37a)</sup>

yadā bhagavā veluvagāmake<sup>(38)</sup> pacchimavassam vassī, tatth' eva te<sup>(39)</sup>

(35) 注<sup>27</sup>参照。

(36) ここには長大な欠落が予想される。

(37) veluvagāmake. 底本は veluvanagāmake. 異説 (C, H) を採用する。Beḷuvagāmaka という綴りもある。

(37a) この一文は原文が文法的に見ておかしい。意識した。異説 (P<sub>1</sub>) を参考にすれば以下のように訂正できるかもしれない。

\*tathāgato gihikāle ekūnatimśavassāni mahāpadhānakāle chavassāni buddhattakāle pañcacattāḷisavassāni, imesam sampiṇḍitattā asīti-āyuko bhagavā ahoṣi

(38) veluvagāmake. 底本は veluvanagāmake. 異説 (H) を採用する。しかし前注の\*veluvagā

(50)

māse kharo ābādho uppajji<sup>(40)</sup>. catuddasa-samāpatti-osathehi attano rogaṃ sugandha-gandho-dakadhārāsitta-jalitānalasambhāraṃ viya ca varamantānubhāvasamūpasanta-sīghakharavisaniṇṇāṇāṃ viya ca sudhābhojanavinodita-addhānamaggapaṭiṇṇa-khuppipāsaṃ viya ca [234] vūpasametvā vuṭṭhavasso bhagavā bhikkhusaṃghehi saddhim pavāretvā sārīputtaṃ etad avoca: “sārīputta na cirass’ eva tathāgato parinibbāyissati<sup>(41)</sup> āyāma sārīputta yena sāvattī tena gacchāma” ti. therō: “sādhu bhante” ti bhagavato vacanaṃ paṭisuṇi.

世尊が竹林村において最後の雨安居を過ごした時に、そこで3ヶ月間、酷い病が生じた。14の等至<sup>(42)</sup>という薬によって、まるで輝く大火に香りよき香水の水流をそそぐように、猛毒の滴を最上のマントラの威力で解毒するように、旅路を歩く際の飢えと渴きを甘露食によって除くように、自身の病を鎮静させてから、雨安居を過ごし終えた世尊は、比丘サンガとともに自恣を行い、舍利弗に「舍利弗よ、久しからずして如來は般涅槃するであろう」と言ってから、「さあ、舍利弗よ、舍衛城に行きましょう」と言った。〔舍利弗〕長老は「かしこまりました、尊師よ」と世尊の言葉に同意した。

atha kho bhagavā bhikkhusaṃghaparivutto yena sāvattī tena gantvā jetavane vihāsi viharante tasmim bhagavati āyasmā sārīputto ekadivasam samāpattito vuṭṭhāya cintesi: “buddho nu kho paṭhamam parinibbāyissati udāhu aggasāvako” ti cintetvā “aggasāvakānaṃ paṭhaman” ti ñatvā tato attano āyusaṃkhāraṃ olokesi: “aho sattāham me āyusaṃkhāro pavattissati<sup>(43)</sup>” ti addasa. tato “kattha nu kho parinibbāyissāmi” ti cintetvā<sup>(44)</sup>

それから世尊は比丘サンガに囲まれて舍衛城に行き、祇園に住した。

---

make が正しい。

(39) vassi. 底本は vasitvā. 異読 (P<sub>1</sub>) を採用する。

(40) uppajji. 底本は uppajjitvā. 異読 (P<sub>1</sub>) を採用する。

(41) 底本は parinibbāyissati ti vatvā とする。異読 (P<sub>1</sub>) により ti vatvā を削除する。

(42) 色の七法 (rūpasattaka) と非色の七法 (arūpasattaka)。片山一良『長部 (ディーガニカーヤ) 大篇 I』大蔵出版、2004年、p.374.、補注<sup>(22)</sup>。Visuddhimagga. p.618 (南伝64, p.338) に詳細あり。

(43) addasa. tato. 底本に欠。異読 (C) により補う。

(44) ベールヴァガーマで最後の雨安居を過ごした釈尊は涅槃經の文脈では、その後、ヴェー

<sup>(45)</sup>そこに世尊が住している時、長老舍利弗はある日、定から起って考えた。「いったいブツダが先に般涅槃するのか、それとも主要弟子が〔先か〕』と考えてから、「主要弟子の〔般涅槃が〕先である」と知り、それから自身の寿行を調べた。「ああ、私の寿行はあと7日存続する〔のみだ〕』と〔見た。それから〕「いったい私はどこで般涅槃するのか」と考え、

“aññātakonḍaññatthero chaddantadahe asītināgakulasahashehi  
\*upaṭṭhito dvādasavassaṃ vasanto tath’ eva parinibbāyi. rāhulo  
pana tāvatim sabhavane pāricchattakamūle <sup>(47)</sup> paṇḍukambalasilāsane  
dasasahassacakkavāḷadevatānaṃ majjhe parinibbāyi, ahaṃ pan’  
etarahi katarasmim parinibbāyissāmī ti cintento “nālandagāmake  
ovarake mātunivesane parinibbāyissāmī” ti nātvā:

「アンニャータ・コンダンニャ長老はチャツダンタダハにおいて八万の龍族に奉仕されながら、12年間を過ごし、そこで般涅槃した。またラーフラは三十三天のパーリチャッタ樹の下、パンドウカンバラ石の座において、一万の鉄圍山世界〔から集まった〕神々の真ん中で般涅槃した。そして私は今、何処で般涅槃するであろうか」と考えながら、「ナーランダ村の、母の家の寝室において般涅槃するであろう」と知って、

“mayhaṃ pana mātā sattannaṃ arahantānaṃ <sup>(48)</sup> mātā hutvā pi  
buddha-dhamma-saṃghesu appasannā. idāni ’ssā atthi nu kho  
upanissayo n’ atthi nu kho” ti āvajjitvā tassā sotāpattimaggassa  
upanissayaṃ disvā: “kassa desanāya tassābhisamayo bhavissatī” ti  
oloketvā:

「私の母は7人の阿羅漢の母になっても、仏・法・僧に対する淨信がない。今、彼女には機根があるのであるだろうか、それともないのであるか」と心を向け、彼女に預流道の機根を見て、「誰の説示によって彼女に現觀が生じるか」と調べ、

サーリーで捨寿行を行うことになる。しかし南方上座部の見解では、南伝の涅槃経において釈尊がナーランダにおいて舍利弗と出会う件があるため、舍利弗の死の知らせを舍衛城で受けたとする SN. 47-13の情報と齟齬を来し、ここに釈尊の舍衛城行きを扶む。詳細は拙稿「舍利弗の入滅をめぐる諸伝承について」『印度学仏教学研究』第54巻第1号、pp.133-138 (L)

<sup>(45)</sup> 以降の記述は Mahāparinibbāna-s. (vol. II, p.102) の註釈 *Dīghanikāya-aṭṭhakathā* (vol.

“mam’ eva<sup>(49)</sup> [235] dhammadesanāya nāññassa<sup>(50)</sup> sac’ āhaṃ tassā<sup>(51)</sup>  
 dhammaṃ na deseyyaṃ bhavissanti me vattāro<sup>(52)</sup> ‘sāriputtena  
 kira devamanussānaṃ attano asaṃbandhānaṃ saggamokkhamagge  
 \*patiṭṭhāpetānaṃ gaṇanā nāma n’ atthi. atha pan’ etarahi attano  
 mātaraṃ micchādīṭṭhiyā harituṃ na sakkoti’<sup>(53)</sup>, tasmā handāhaṃ<sup>(54)</sup>  
 mātaraṃ micchādīṭṭhiyā mocetvā jāto varake yeva parinibbāyissāmi”<sup>(55)</sup>  
 ti cintetvā pañcabhikkhusatehi parivutto yena bhagavā ten’ upasaṅ-  
 kami.

「私の説示のみによって〔彼女に現観が生じ〕、私以外の説示によつては〔生じない〕。もし私が彼女に法を説かなかつたら、私に『舍利弗が天と人の中、昇天の道と解脱の道に確立させた自身の非親族については数えきれない。それにもかかわず、今、自身の母親を邪見から救うことができなそうだ』という非難が生じるであろう。それゆえ、さあ私は母を邪見から解放し、まさに〔自身の〕生まれた部屋で、般涅槃しようと考えて、500の比丘に囲まれて世尊のもとに近づいた。

upasaṅkamitvā bhagavantaṃ pañcapatiṭṭhitena vanditvā uṭṭhāya  
 mahītale sunihitajānumaṇḍalayugalo dasanakkhasamodhānaṃ \*añjalim  
 sirasi samāropetvā<sup>(57)</sup> \*paramavaṇṇaṃ a-vaṇṇaṃ ālaṅ kata-cāmikara-cāru-silā-  
 paṭṭākāra-visālalālāta-bhamu-yugantara-jālā-sobhā-rato sirighana-mukha-

II, p.549-) にほぼ一致する。

(46) 底本は asītināgakulasahashehi upatthāko. このままでは読解不能である。。

(47) pārichattakamūle. 底本は pāricchattamūle とするが訂正する。誤植と思われる。

(48) idāni ’ssā. 底本は idāni として ’ssā を欠く。異読 (C, C<sub>1</sub>) により補う。

(49) mam’ eva. 底本には mam eva とある。

(50) nāññassa. 底本は bhavissati” ti aññāya とする。異読 (C) を採用する。

(51) tassā. 底本に欠。異読 (C) により補う。

(52) vattāro. 底本には vattāro ti とあるが異読 (C, C<sub>1</sub>) により ti を削除する。

(53) 底本には sāriputto kira devamanussānaṃ attano asaṃbandhānaṃ saggamokkhamagge patiṭṭhāpetvā gaṇanā nāma n’ atthi とある。異読 (C, P<sub>0</sub>) から sāriputtena kira devamanussānaṃ attano asaṃbandhānaṃ saggamokkhamagge patiṭṭhāpetānaṃ gaṇanā nāma n’ atthi という読みが得られるが、この異読 (C) の patiṭṭhāpetānaṃ を訂正する。

(54) 底本の evaṃ vattāro bhavissanti を異読 (C) により削除する。

(55) 底本は jāto varake と切っている。

(56) 底本には pañcabhikkhusate gahetvā tehi parivutto とあるが、異読 (C<sub>1</sub>) を採用する。

(57) 底本には dasanakkha samodhānaṃ añjalisirasi samāropetvā とある。異読 (C<sub>1</sub>) añjulim

maṇḍalam<sup>(58)</sup> olokeno bhagavantam etad avoca:

近づいて、世尊に五体投地によって礼拝してから、立ち、地に両膝をしっかりとつけて、十指の爪を合わせた合掌を頭上にかかげ、最上色に彩られた黄金のように美しい石板にも似た広い額の両眉の間（白毫）から放たれる光の美しさに喜び、栄光に満ちたまどかな尊顔を見つめながら世尊に申し上げた。

253 chinno dāni ca vissāso lokanātha mahāmuni,<sup>(59)</sup>  
 gamanāgamanam n' atthi pacchimā vandanā ayaṃ.  
 「世の導師よ、大牟尼よ、今や親交は断たれます<sup>(61)</sup>。往来はなく、これが最後の礼拝です。

254 jīvitam appakam mayham ito sattāhaccayena,  
 nikkhipeyyāṃ aham deham bhāroropanam yathā ti  
 私の命はわずかで、今から七日で、私は身体を捨てます。重荷を下ろすように。

[236] sutvā bhagavā: kattha parinibbāyissasi sārīputtā ti pucchi.  
 atthi bhante magadhe nālandagāme jāto varako tath' eva parinibbāyissāmi ti. kalam maññasi<sup>(62)</sup> sārīputtā ti āhaṭato thero bhagavantam padakkhiṇam katvā catūsu thānesu vanditvā āpucchitvā pañcasatehi bhikkhūhi saddhiṃ pakkāmi.

聞いて、世尊は「どこで般涅槃するのか、舍利弗よ」と尋ねた。「尊

を参考にして訂正した。

(58) 底本は paramavaṇṇa-vaṇṇālaṅkata-cāmikara-cāru-silāpatākāram viya visālalātam bhamu-yugantara-jālā-sobhā-rata-sirighana-mukha-maṇḍalam. 異読の支持は得られないが、思い切って訂正して訳出する。

(59) lokanātha mahāmuni. 底本は lokanāthamahāmuni とつなげているが切った方がよい。

(60) 次の2偈は *Dīghanikāya-atthakathā* (vol. II, p.550) にある。

chinno dāni bhavissāmi, lokanātha mahāmuni;  
 gamanāgamanam n' atthi, pacchimā vandanā ayaṃ.  
 jīvitam appakam mayham, ito sattāham accaye;  
 nikkhipeyyāṃ aham deham, bhāroropanam yathā.

(61) chinno dāni ca vissāso. 'ca' が不要に思われるが、音節の数から削除はできない。やはり 'chinno dāni bhavissāmi' 「今や私は〔導師から〕断ち切られるでしょう」という *Dīghanikāya-atthakathā* の読みが正しいであろう。

(62) 底本は jāto varake と切っている。

(63) maññasi. 底本は maññasi. 異読 (C<sub>1</sub>) を採用する。

師よ、マガダのナーランダ村に〔私の〕生まれた寝室があります。そこで般涅槃します」と。「時を知りなさい、舍利弗よ」と言った。長老は世尊を右繞し、四か所で礼拝し、暇を告げて、500人の比丘とともに出立した。

tadā bhagavā parivāre <sup>(64)</sup>ṭhitabhikkhū āha: “anugacchatha bhikkhave tumhākaṃ <sup>(65)</sup>jetṭhabhātikaṃ, tādisassa pana bhikkhuno dassanaṃ dullabhan” ti. atha te bhikkhū yāva dvāraakoṭṭhakā aṭṭhaṃsu. therō: “nivattetha tumhe āvuso bhagavantāṃ mā pamattā hothā” ti vatvā attano parisāya saddhiṃ pakkāmi.

その時、世尊は追従者の中にあつた諸比丘に言った。「比丘らよ、汝らの長兄について行きなさい。このような比丘に会うことは困難である」と。それから彼ら諸比丘は門屋まで〔列をなして〕立った。〔舍利弗〕長老は「友らよ、世尊のもとへ戻りなさい。決して放逸であるなかれ」と言つて、自身の衆とともに立ち去つた。

so sāyaṃ nālandagāmaṃ patvā attano jāto varake yeva nisīditvā tasmim rattibhāge dhammaṃ desetvā brāhmaṇiyā sotāpattiphalaṃ datvā \*paccūsasamaye <sup>(66)</sup>thero bhikkhusaṃghaṃ āpucchitvā parinibbāyi. evaṃ sārīputto kattikapuṇṇamadivase nālandakagāme parinibbāyi. mahāmoggallāno pi kālasilāyaṃ kattikamāsassa kālapakkhe āmāvasakadivase adhimattadukkhena parinibbāyi.

彼はナーランダ村について、自身の生まれた部屋に坐つて、その夜分に法を説いて、婆羅門女に預流果を与えて、暁近くに長老は比丘サンガに暇を告げて般涅槃した。このように舍利弗はカッティカ月の満月の日にナーランダ村において般涅槃した。大目連もカーラシラーにおいてカッティカ月の黒分の新月の日に、極度の苦痛によって般涅槃した。

(64) anugacchatha. 底本は nanu gacchatha. 異読 (C, C<sub>1</sub>) を採用する。

(65) jetṭhabhātikaṃ. 底本は jetṭhabhātikassa. 異読 (C) を採用する。

(66) 底本は paccūsasamaye とする。